

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16804

研究課題名(和文) グループ活動を英語で行うための中間言語語用論研究

研究課題名(英文) A study of Interlanguage Pragmatics for Task-Based Group Work

研究代表者

加藤 和美 (Kato, Kazumi)

東海大学・公私立大学の部局等・講師

研究者番号：60631801

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究者は、学習者がグループ活動を英語で円滑に行うための特別授業を通常授業に組み込む必要があると考え、中間言語語用論研究を基に教材開発と教授法の研究を行ってきた。1年目は第二言語習得と語用論を考慮してこれまで作成してきた教授法を改良、書き起こしフィードバックの活動等を追加した。2年目に新しい指導方法を実践しライティング授業にて教材とその教授法の効果を示した。最終年度は、2016年度までに作成したiPad用ビデオ教材と教授法を大学だけでなく高校でも利用できるようにさらに改良を重ね実践した。また、渡英して同じタスクを利用して異なる教材を作成、ICTを利用して教師の負担を減らす方法を組み込んだ。

研究成果の概要(英文)：This is a study of interlanguage pragmatics to create a teaching method and produce authentic video materials showing how native-English-speaking students use English as an action language in task activities. This is an attempt to solve the problem that quite often students heavily rely on Japanese in the process of solving tasks and only use English in their final product. In the first year, the researcher revised the previous methodology for group work activities. The new methodology includes transcribing and writing activities and teachers can see students' SLA and pragmatic improvement through student writing. The second year, the researcher conducted the new methodology for writing classes and saw positive effects. Also the methodology has been revised for high school students and conducted a 6-day lesson. In the final year, the researcher went to the U. K. to create a new task materials for further activities and used ICT to reduce teacher's work.

研究分野：中間言語語用論 教授法 英語教育 TBLT ICT

キーワード：Interlanguage Pragmatics SLA ICT 中間言語語用論 教授法 アクティブラーニング フォーカス・オン・フォーム

1. 研究開始当初の背景

かつての「コミュニケーション能力」は、Canale & Swain(1984)のコミュニケーション能力のモデルのように、文法能力、社会言能力、方略的能力、談話的能力の4つの要素から構成されると定義されていたが、Bachman & Palmer (1996)のコミュニケーション能力のモデルでは、言語能力、方略的能力、精神生理学作用と大きく3つに分けて定義するようになった。Bachman & Palmer は言語知識をさらに構成知識、語用論的知識という2つの要素に分け、そしてそれぞれをさらに文法知識とテキスト知識、発語内知識と社会言語知識に細分化した。

Canale & Swain のモデルと比べた場合、Bachman & Palmer は語用論的能力を発語内能力と社会言語能力に分類しているため、「発話とそれによって遂行される行為との関係」と「適切な言語使用を推進する文脈的特徴」を取り扱うとされる語用論の定義 (Van Dijk 1983) に合致している (Safont Jorda 2005)。また、Leech(1983)や Thomas (1983)の語用言語学と社会語用論の分類にも対応しているのにより妥当だと考えられている。さらに、Bachman & Palmer のモデルは語用論的能力をコミュニケーション能力の主要な構成要素の1つとして提示しているため、語用論研究だけでなく、外国語教育の分野においても重要視されるようになった (清水 2009)。

語用論と第二言語習得の2つの学問領域に属する研究は「中間言語語用論 (interlanguage pragmatics)」と呼ばれ、「非母語話者の第二言語の語用論的知識の使用と習得の研究」(Kasper1996)と定義されている。**中間言語語用論研究は、学習者の発話行為の産出を母語話者のものと比較して学習者の発話行為の特徴を明らかにする研究**が多く、その研究対象は、依頼、謝罪、断り、ほめ/ほめに対する返答、感謝、不平など一部の限られたものに集中している (清水 2009)。本研究者はイギリスへの海外ホームステイ研修の引率を10年以上行っている。ホームステイ中での学習者のミスコミュニケーションのトラブルを幾度も見ており、語用論のポライトネス研究ではホームステイ中で起こりうる「断り」表現の研究を行ってきた。イギリスと日本の大学で談話完成テストを行い、日英の断り表現の傾向を Beebe, Takanashi & Uliss-Welt (1990)の意味公式に照らして分析し、発見された差異を報告した (加藤 2004, 2005)。また、この分析結果を本勤務大学の付属高校の異文化理解授業で使用し、明示的指導を行う事により社会言語能力 (特定の言語使用状況に適切な言語を算出し解釈することを可能にする知識、慣用表現、文化的な参照基準(Bachman & Palmer 1996)の習得を促すことが可能であることを報告した (加藤 2013)。さらに、2013年から

は、より広範囲に談話分析結果を応用できるよう、研究対象を**教室内での発話行為**に変更した。学習者が教室内で行うタスクと、英語母語話者が行うタスク活動の様子を学習者自身が比較分析することにより、語用論的能力の習得に加え、第二言語習得の両方を目指すことができるのではないかと考えた。また、グループ活動を英語で円滑で行う事を目的とした談話分析の研究や教材が開発されていないことから、教材開発と指導方法の研究を始めることになった。

2. 研究の目的

高等学校新学習指導要領の改訂に伴い、外国語科では「授業は英語で行うことを基本とする」こととなった。教員の英語による授業進行を行ったとしても、学生同士のグループ活動は未だ日本語が飛び交っているのが現状である。現在のところ学習者は、どのような英語表現を使い、どのように進行したらいいのかわからないまま英語でのグループ活動を要求されていることが多い。そこで本研究では、日本の大学の英語授業で行われているタスク活動と同じタスクをイギリスの大学生を対象に行い、日本人英語学習者が英語母語話者のグループ活動中の発言を比較分析する事で円滑なグループ活動が行う事ができるのではないかと考えた。第二言語習得の概念と語用論研究の2つの学問に属する**中間言語語用論的の理論をもとに学習者がグループによるタスク活動を英語で円滑に行うための教材と指導法を開発する。**

3. 研究の方法

本研究では、三浦(2006)が提示した a.問題解決型、b.立案型、c.作品完成型のタスクを利用してより多くの英語母語話者グループのモデル教材を作成し、分析授業の開発と実践を行う。2014年にイギリスの大学教師2人とそのクラスの学生の協力のもと、タスクc.作品完成型タスクのうち Picture Story のグループ活動中の自然談話の録画を行い、教材作成をして授業実践を行った。習得した英語表現を応用するために、a,b,c.の別のタスクを使ってグループ活動を行う必要があると考えた。本研究1年目に新しいタスクを厳選、再度渡英してデータを収集する。8月にイギリスの大学教室内でタスクを使ったグループ活動を依頼しその作業中の自然談話をビデオカメラで録画する。2年目は収集した自然談話のビデオを編集し iPad 内に入れ教材を作成し勤務大学の学生を対象に検証して質的研究を行う。3年目には国内の大学にて授業実践を行い研究結果を報告する。

4. 研究成果

本研究1年目は、タスクの定義づけの研究とフォーカス・オン・フォームの定義に従って教授法の作成を始めた。特に、タスクを行った後に言語形式を分析する活動を導入する

ことに留意した。また、言語形式を分析した後に、エクササイズ（インプット）を行い、第二言語習得を促した。このような方法で、過去に作成したイギリス人大学生のモデルビデオを使った指導方法を改良した。本研究で利用するタスクは、3. で述べた a. 作品完成型タスクを再度利用した。同じタスクで異なる絵を利用することで、繰り返しグループ活動を行い習得に結ぶことができると考えたからである。6つの絵から4つを選んでストーリーを作成、その後、グループでより面白いストーリーを1つ作成するというタスクである。このタスクの特徴は、まず自分の持っている知識を使ってアウトプットし、その後、一連の言語活動が終わった後に再度タスクを行い、上達を比較することである（Pre-Task, Post-Task）。ストーリーを作成することを頂上タスクとし、頂上タスクに向かって7つの小タスクを設定し、ひとつひとつのタスクを達成していくそのプロセスで英語運用能力を付けることができるようになっていく。Pre-Task, Post-Task のどちらも iPad にて動画撮影しているため、英語運用能力の上達を動画にて比較することができる。また、時間配分や手順を工夫すれば、録画した動画を書き起こし、フィードバックを加えることができることがわかり、言語習得の活動の前後で習得の効果を文字で確認することができた。また、これらは学生自身だけでなく、教員も確認することができることに大きな価値が見いだされた（加藤 2016）。また、これら一連の指導法を、「グループ活動を英語で円滑に行うための指導」と題し、全5回で完結する特別授業のシラバスを作成した（図1）。5回で完結させる活動であるため、「リーディング授業」「ライティング授業」「プレゼンテーション授業」など、英語科目のどの授業でもこの特別授業を組み込んで利用できるようになった。

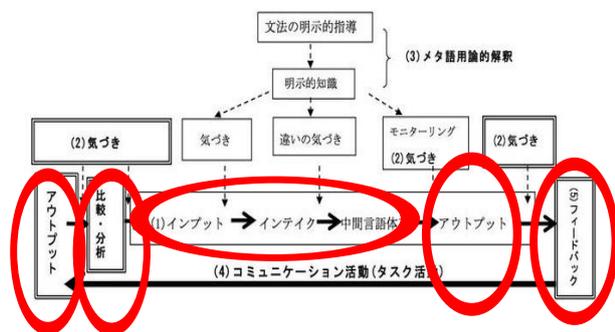


図1：グループ活動を英語で行うための指導図（全5回分割の図）

さらに、ライティング授業では、グループ活動中の「気づき」をエッセイとして書く活動を組み込んだ（図2）。したがって、頂上タスクとして「グループ活動を英語で円滑に行

う」という目標だけでなく、2つ目のタスク「どのようにしたら英語でグループ活動が円滑に行うことができるかを300語の英語で書けるようにする」というライティングのタスクを設定した。教員が学習者の気づきをエッセイから確認することができ、さらにどのようにしたらグループ活動が英語で円滑にできるようになるかを学習者に考えさせ、教員に発信する機会となった。それにより、教員側は学習者へのフォローの仕方を工夫できるようになった。

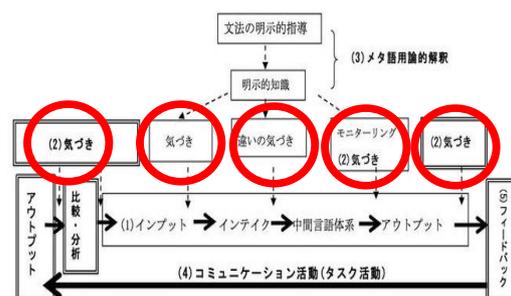


図2：グループ活動を英語で行うための指導図（気づきの工夫）

これらの指導方法を早くからさまざまな科目にて実施したため、次年度に行う予定であった第二言語習得の効果の検証研究を1年目に行い、学会にて発表することができた（加藤 2015）。さらに、研究の初年度から本の執筆にとりかかり、翌年の**2016年7月には共著にて「高校英語授業を知的にしたい」（研究社）を出版し、第8章に指導方法の詳細を掲載した。**

研究2年目も同様に指導法の改良に努めるとともに、ハンドアウトや教材を作成した。グループ活動を英語で行うための指導方法の冊子を作成し、その冊子を利用しての授業実践を行った。これまでに作成したビデオ教材をウェブ上に載せ、そのQRコードを冊子に印刷し、誰でも簡単に英語母語話者の活動モデルのビデオを観ることができるようにした。研究3年目は、2016年度までに作成したiPad用ビデオ教材と、改良した教授法で2つの大学にて実践した。また、高校でも利用できるようにさらに改良を重ね、同じ教材を利用して異なる教授法を作成した。高校で実践する際には文法を重視する傾向が多い。そのため、グループで行うタスク活動の際に生徒が書き出した「言いたくても言えなかった表現」を教師が英訳し、文法別頻度を調査し、頻出英語表現のリスト117個をクラスごとに作成した。そしてリストを生徒に配布し、文法解説を行う授業方法（明示的指導）を指導方法に追加し、実践した。また、その成果を学会にて発表した（加藤 2018）。さらに、グ

ループ活動中に学習者が「言いたくても言えなかった英語表現」を 2015 年度から 2017 年度までに集めた 279 個をまとめ、第二言語習得のためのコーパス分析を行い、頻出リストを作成した。また、それをゲーム感覚で習得できるように**スマートフォンアプリを利用して言語習得の教材を作成した**。これらのアプリは、イギリス人大学生がビデオ教材の中で発した英語表現をまとめたスマートフォンアプリ教材と（最終頁に QR コードにて記載）、学習者が「言いたくても言えなかった表現」を利用したアプリ教材をそれぞれクラスごとに作成した。これらにより、5 回の特別授業終了後も学習者は引き続きゲーム感覚で英語表現の習得することが可能となり、別の英語授業のタスク活動でもスマートフォンを使って復習がいつでもでき、ICT を有効に利用することができた。最後に、イギリスの大学を訪れ、同じタスクで別の学生にグループ活動を行ってもらい、ビデオ録画を行いデータを収集した。また、タスクの教材に利用する絵カードを新たに作成し、それらを使ってグループ活動を再度行ってもらい、ビデオ録画をした。イギリス渡航によって、2 種類のビデオデータを収集することができたため、さらなる教材作成ができた。これらの報告として、2017 年度には国内の学会発表だけでなく、**国際学会にて指導方法と教材を紹介した。**

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 加藤和美 (2018). 「グループ活動を英語で行うための特別授業導入の提案」『中部地区英語教育学会紀要』第 47 号, 157-164
査読あり

② 加藤和美 (2016). 「グループ活動を英語でーグループ活動の分析を題材としたライティング授業」『中部地区英語教育学会紀要』第 45 号, 177-184. 査読あり

③ 加藤和美 (2015). 「グループ活動を英語で行うための指導ー実践報告と今後の課題ー」『JACET 中部支部紀要』第 13 号, 101-110. 査読あり

〔学会発表〕（計 8 件）

① Kazumi Kato (2018). A video analysis method for teaching group discussion *ESBB's 55th International Conference - ESBB 2018 Conference and Symposium on English Academic Writing in a Global World* presentation

② Kazumi Kato (2017). A Method and iPad Materials for Teaching Group Discussion in

English *JALT Shizuoka meeting presentation*

③ Kazumi Kato (2017). Teaching Method for Group Discussion in English *43rd Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition JALT 2017 presentation*

④ 加藤和美 (2017). 「グループ活動を英語で行うための特別授業導入の提案」第 47 回中部地区英語教育学会 長野大会 発表

⑤ 加藤和美 (2016). 「学習者のニーズに応え続ける授業」全国英語教育学会 第 42 回埼玉大会 発表

⑥ 加藤和美 (2016). 「グループ活動を英語でー第二言語習得はできたのかー」第 46 回中部地区英語教育学会 三重大会発表

⑦ 加藤和美 (2015). 「グループ活動を英語で行うための指導ー実践報告と今後の課題ー」JACET 中部支部大会 発表

⑧ 加藤和美 (2015). 「グループ活動を英語でーグループ活動の分析を題材としたライティング教材」第 45 回中部地区英語教育学会 和歌山大会 発表

〔図書〕（計 1 件）

① 三浦孝・亙理陽一・山本幸次・柳田綾 編 (2016). 加藤和美 第 8 章 小グループが英語で打ち合わせ、英語でプレゼンテーションできる指導ーネイティブ・スピーカーのグループ活動から学ぶ 198-228.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

① イギリス人のグループ活動のモデルビデオ 2017 年 6 月作成

<https://youtu.be/nA78MQByUo>

② スマートフォンアプリを利用した言語習得のためのゲーム

（イギリス人によるモデルビデオ教材からの英語表現）

<https://quizlet.com/50pgea>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 和美 (Kato Kazumi)

東海大学・清水教養教育センター・講師

研究者番号：60631801

